

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 10 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520285

研究課題名（和文） カナダ先住民の口承文学にみる環境正義の現代的意義

研究課題名（英文） A Look at the Current Significance of Environmental Justice in Canadian First Nations Oral Literature

研究代表者

佐藤 アヤ子 (SATO AYAKO)

明治学院大学・教養教育センター・教授

研究者番号：70139468

研究成果の概要（和文）：〈環境正義〉の概念は、自然の生態系を守ることと社会的正義の同時追及の必要性を示す概念として注目されている。この概念をカナダ先住民の口承文学に探り、一見荒唐無稽に思える彼等の神話が、社会学的、科学的整合性を理解した「先を見越した」ものであったかを考察。さらに、環境破壊が増す一方の今日において、大地との共生、自然界に対する正義を優先する先住民の知恵が現代のカナダ先住民作家やマーガレット・アトウッドのようなカナダ人作家にどのように継承されているかを考察した。この概念を用いて文学作品分析を行う研究は少なく、今後活用されよう。

研究成果の概要（英文）：The concept of Environmental Justice attracts attention as an idea which indicates the need for the simultaneous investigation of social justice and the maintenance of the natural ecosystems. I studied how this important concept was represented in the oral literature of the First Nations. I also investigated how their myths, which may seem initially wildly fanciful, are “proactive” and demonstrate both sociological and scientific consistency. Furthermore, my research shows that the First Nations ecological vision has had a profound effect on Canadian writers. At the present time, when environmental disruptions seem to be rapidly increasing, the wisdom of the indigenous people who give priority to unity with the earth and seek justice for the natural world can be found in not only the works of contemporary Native Canadian writers but others, like Margaret Atwood. Since there have been only a few studies to analyze literary works through the lens of Environmental Justice, my studies may be influential as a new approach to reading First Nations and Canadian literature.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	650,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：環境正義、英語圏文学、カナダ文学、カナダ先住民、デイビッド・スズキ、トムソン・ハイウエイ、マーガレット・アトウッド、国際ペン東京大会、東京国際ブックフェア

1. 研究開始当初の背景

〈環境正義〉の概念は、1980年代に多民族国家であるアメリカの社会的背景をもとに生れた考え方で、環境的人種差別主義への批判として展開した環境正義運動に端を発している。その後の地球環境問題への関心の高まりに伴い、自然や環境の問題を導入することによって、文芸批評の観点から分析する環境文学研究が行われてきた。しかし、日本では英語圏における環境文学の研究はアメリカ文学関係がほとんどで、カナダ先住民の口承文学を環境正義の観点から分析した研究は皆無であった。カナダにおいても同じであった。このような状況を鑑みて、本研究は始まった。

2. 研究の目的

先住民の口承民話は超自然的な話が多く一見荒唐無稽である。しかしこの荒唐無稽に思える口承民話が大地との共生を謳う〈環境正義〉を視野に入れた社会的、科学的整合性を理解した“proactive”な、すなわち先を見越したものであったことに注目し、カナダ先住民の口承文学を環境正義の観点から分析するのが目的であった。さらに、この環境正義の概念がトムソン・ハイウエイなどの現代のカナダ先住民作家や今日の地球環境に警鐘を鳴らすマーガレット・アトウッドをはじめとする現代英語圏カナダ作家にどのように受け継がれているかを考察することも目的であった。

環境破壊が急速に進む今日において、カナダ先住民の口承文学を〈環境正義〉の観点から分析する研究は国内および海外においてもなく、日本から発信できる貴重な研究と考えられた。

3. 研究の方法

カナダ先住民は大きく8つの部族に分かれる。広大なカナダでは地政学的に違ふと民話も異なる。そこで次のような目標を立てた。

(1) 部族の民話を水や風などの自然、動植

物、資源といったカテゴリーに分類し、環境正義の視点からそれらの民話が現代社会にどのような意義を持つかを考察。さらに、それらが社会的、科学的整合性を踏まえたものであるかを検証。必要に応じてアイヌ、オーストラリアのアボリジニの口承文学との比較を試みた。

(2) ブリティッシュ・コロンビア大学、サイモン・フレーザー大学、トロント大学、クイーンズランド大学、国立民族学博物館、北海道大学等で収集した文献、資料からの分析。さらに、貴重な口承民話を多く持つ部族のコミュニティを訪れて、現代の語り部たちがどのような形で環境正義を伝えているかを考察した。

(3) トムソン・ハイウエイ、リー・マラル等々の現代のカナダ先住民作家たちをインタビューし、部族に伝わる普遍化された環境正義の概念を自作品の中でどのように活用しているかを分析。さらに、現代社会に生きる先住民作家にとって「伝統」が持つ今日の意味を考察した。

(4) マーガレット・アトウッド、グレアム・ギブソン等の環境運動活動家としても著名な現代英語圏カナダ作家たちにインタビューし、環境正義について意見交換を図った。ますます拍車がかかる地球環境の悪化は多くの作家たちの関心事である。特に、環境正義の概念がアトウッドの最近作にどのように内包されているかを考察することが今後の課題でもある。

4. 研究成果

〈環境正義〉とは、人間が環境に対して起こした間違いを正すことである。先住民の口承民話が伝えてきたように、人が地球に残した数々の環境破壊は人間の責任である。人間は、自分たちだけが特別扱いをされているかと思っているかもしれないが、それは間違いである。今回の東日本大震災で起こった福島第一原発事故がそれを明白に語っている。アトウッドは、『月刊文藝春秋 3月臨時増刊号』（2012・03・01）の東日本大震災特集に寄せ

た「日本人への希望のメッセージ」の中で、原発が抱える問題をこう語る。「今回の東日本大震災によって世界中の人たちは学びました。天災が人工テクノロジーの暴走と結びつくと、予測を超えた破壊をもたらすという教訓です」と。

先住民の口承民話には、荒唐無稽な話が多い。しかし、そこは勧善懲悪の世界である。一見荒唐無稽な先住民の口承民話に社会学的、科学的整合性を解明するとき、著名な遺伝子学者で、環境問題運動家として活躍するカナダのデイビッド・スズキの見解が参考になる。科学者として地球破壊を深刻に受け止め、先住民の叡智に注目したスズキは、地球規模の破壊を救う道は「準宗教的」になることであると語る。「我々のジレンマは情報や科学技術の才能の欠如ではない。むしろ問題は、残された自然との関係の気づき方であり、物事の壮大な相関性、仕組みにおける我々の役割に気づくことである。」またスズキは、「生命愛」を心に抱くことに注目する。私たちはDNAや進化を通して大地の動植物とつながっている。「父なる空、母なる大地、兄弟姉妹なる動植物」と語る北米先住民の世界観が、実は科学的な根拠に裏付けされた先見性を持つ部族の知恵であることもわかる。

〈環境正義〉の概念は、本研究を始めたときはほとんど知られていなかった。〈環境正義〉の概念を用いて文学作品を分析する研究もほとんどなかった。しかし、「第76回国際ペン東京大会2010『環境と文学—いま、何を書くか』」で、海外の作家たちと「文学にみる環境正義と現代的意義」のセミナーを開催したこと、「第17回東京国際ブックフェア」で「環境正義と文学、いま、何を書くか」にパネラーとして参加し、「環境正義と文学」の関係をカナダ先住民民話とマーガレット・アトウッドの最新作を中心に発表したことは、新しい文学分析として内外に発信する良い機会となった。さらに、東日本大震災と福島第一原発事故は、内外の多くの作家たちに「災害と文学」、「環境と文学」の関係を考察する機会となっている。このような状況を鑑みたとき、「環境正義」の概念は時宜を得た文学の主要なテーマとして今後ますます意義を持つと確信する。

主な【研究成果】は、以下の通りである。

(1)平成22年度

- ① 4月： 明治学院大学国際平和研究所に

て、「先住民文化・文学にみる環境正義と現代的意」と題して研究報告。

- ② 5月：国際交流基金の主催で、トロントにて「日本カナダ作家フォーラム—言語を超えた文学のダイアローグ—」に、阿刀田高氏、浅田次郎氏、森絵都氏、堀武明氏と参加。司会を務めた。
- ③ 7月：「第17回東京国際ブックフェア」で、阿刀田高氏、吉岡忍氏、西木正明氏、中村敦氏らと共に「環境と文学—いま、何を書くか」のシンポジウムにパネラーとして参加。「環境正義と文学」の関係をカナダ先住民民話とマーガレット・アトウッドの最新作を中心に発表。
- ④ 9月：「第76回国際ペン東京2010『環境と文学—いま、何を書くか』」において、カナダの小説家で批評家の Graeme Gibson 氏、台湾の先住民作家の Shaman Rapongan 氏、オーストラリアの先住民シンガー・ソングライターの Shellie Morris 氏と共に「文学にみる環境正義と現代的意義」のセミナーを組織。内外の注目を集めた。「文学と環境正義」というテーマが広く知れ渡りようになった。
- ⑤ 12月：「オーストラリア先住民文学にみる環境正義」と題し、明治学院大学国際平和研究所が組織する研究会で、1950年代にオーストラリアの先住民聖地マラリングで行われたイギリスによる核実験で被害者となったアボリジニを描いた戯曲を環境正義の見地から分析し、発表。

(2)平成23年度

- ① 2月：「マーガレット・アトウッド」を『すばる2月号』に執筆。
- ② 11月：「第29回日本カナダ文学会年次研究大会」において、アベナキ族の口承民話を例にあげて「カナダ先住民の口承文学にみる環境正義の現代的意義」を発表した。本発表は、明治学院大学国際平和研究所発行の『PRIME』（2013年3月発行）に論文として掲載予定。

(3)平成24年度

- ① 3月：ブッカー賞受賞作家であり、環境運動家としても環境問題について政治的提言、講演を積極的に行っているマーガレット・アトウッド著『負債と報い—豊かさの影』（2012年3月岩波書店刊）の翻訳出版。多くの新聞の書評欄で紹介

された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 佐藤アヤ子 「マーガレット・アトウッド」 『すばる2月号』 集英社 平成23年2月 274-277頁

〔学会発表〕(計4件)

- ① 佐藤アヤ子 「カナダ先住民の口承文学にみる環境正義の現代的意義」 「第29回日本カナダ文学学会年次研究大会」 平成23年11月12日 共立女子大学
- ② 佐藤アヤ子 「オーストラリア先住民文学にみる環境正義」 「明治学院大学平和研究所」 平成22年12月2日 明治学院大学
- ③ 佐藤アヤ子 「環境と文学—いま、何を書くか」 「第17回東京国際ブックフェア」 東京ビッグサイト 平成22年7月11日
- ④ 佐藤アヤ子 「先住民文化・文学にみる環境正義と現代的意」 「明治学院大学国際平和研究所」 明治学院大学 平成22年4月

〔図書〕(計1件)

翻訳

- ① マーガレット・アトウッド著/佐藤アヤ子訳 『負債と報い—豊かさの影』 岩波書店 2012年3月 239頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 アヤ子 (SATO AYAKO)
明治学院大学・教養教育センター・教授
研究者番号：70139468

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし